

平成 27 年 7 月 17 日  
県 土 整 備 部

## 北極海航路に関する共同研究成果について

国土交通省国土技術政策総合研究所(国総研)と独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)、北海道開発局(北開局)及び青森県では、人工衛星から取得される AIS\*信号の北極海航路整備への活用可能性を検証する共同研究を平成 26 年 10 月から実施してきましたが、この度、平成 26 年(9 月～11 月)の北極海地域ならびにその周辺地域での航行実態等を取りまとめたので、お知らせします。

\* AIS(Automatic Identification System): 船舶の識別符号、種類、位置、針路、速力、航行状態及びその他の安全に関する情報を自動的に VHF 帯電波で送受信し、船舶局相互間及び船舶局と陸上局との間で情報の交換を行うシステム。

### 記

1. 共同研究の概要・・・資料1参照

2. 共同研究の成果について・・・資料2参照

<成果のポイント> ※以下①～③については、平成 26 年 9 月～11 月(3 ヶ月間)の動向。

①北極海ロシア側航路(North East Passage)航行船舶

・貨物船・タンカー27 隻、客船 1 隻、調査船 4 隻、計 32 隻を把握。

・貨物船・タンカー27 隻のうち、15 隻については、宗谷海峡や津軽海峡を經由して、ロシア北極海側と中国・韓国等とを航行する船舶。

②北極海カナダ側航路(North West Passage)航行船舶

・貨物船 1 隻、客船 1 隻、調査船 3 隻、計 5 隻を把握。

・客船については、平成 26 年 10 月に小樽港に寄港した北極圏クルーズ船舶。

③その他

・ベーリング海に面した極東ロシアやアラスカの海域を航行する船舶、計 20 隻を把握。

④北極海での船舶航行の可視化

・海氷が少ない 8 月中旬から 10 月にかけて航行が多く、砕氷船によるエスコートが無いことが判明。

今回明らかになった北極海航路の動向(データ)は、将来同航路の商業利用が進展した場合、津軽海峡が重要なエリアとなり得ることを示唆しています。県としては、引き続き共同研究の枠組みに参加しながら、津軽海峡の可能性を検討していくための基礎資料として、最新の動向や知見を継続的に把握・蓄積していく予定です。

報道機関提供用資料	
担当者	港湾空港課 港湾振興グループ 担当 千葉GM
電話番号	直通 017-734-9676 内線 4316
報道監	県土整備部次長 櫻庭 憲司

平成27年7月17日

県土整備部

## 北極海航路に関する共同研究成果についての知事コメント

本共同研究は、「北東アジアにおけるグローバル物流拠点化」を視野に入れた青森県ロジスティクス戦略の一環として、北極海航路という新たな視点で津軽海峡の現状を把握し、将来の可能性を検討していこうとするものです。

この度、昨年10月から実施してきた北極海航路に関する共同研究の平成26年度分の成果を取りまとめました。これにより、現に、北極海ロシア側と中国・韓国等とを航行する船舶が存在していること、カナダ側では北極圏クルーズの客船が日本に寄港していることなどをデータとして把握したところです。これら北極海航路の動向は、グローバル物流における津軽海峡の可能性を検討していくための重要な基礎資料となります。

今回、北極海航路を利用する貨物船やタンカーの日本への寄港例は確認できていませんが、今後のデータ蓄積や分析を進めることで、日本における津軽海峡エリアの重要性が一層浮き彫りになると考えています。

10年先、20年先を見据え、津軽海峡エリアを基点とすることで、本県のみならず、日本の経済成長に対してどのように貢献できるのかという視点に立ち、引き続き共同研究の枠組みに参加しながら、最新の動向や知見を継続的に把握・蓄積していきます。